

「その後の不自由」を生き延びる

～北海道 大嶋栄子さん(NPO法人リカバリー)の実践に学ぶ～

DV被害者は、加害者と離れた後、暴力被害の後遺症を抱える場合が多く、生活再建に多くの困難があります。北海道でNPO法人を立ち上げ、DV被害者女性を対象に、就労継続支援B型事業所やグループホーム等を運営している大嶋さんから、生活再建にむけた先駆的な実践事例を学びました。



日時：平成29年3月10日(金) 14:00～16:30 場所：クレオ大阪中央 参加者：54人

NPO法人リカバリーとは

2002(平成14)年9月、さまざまな被害体験を背景に、病気や障害に苦しむ女性への援助を目的にNPO法人リカバリーを立ち上げました。リカバリーという言葉は、病気や障害のために失ったものを取り戻すことを意味します。病気は元に戻せないかもしれないけれど、「自分が望む生活を実現する力」や「夢」は取り戻すことができます。人の中で負った傷は、人の中で快復していくのだと考えます。法人は現在3つの事業所(独立生活型・就労継続支援B型・共同生活型)を運営しており、10歳代後半から30歳代の利用者が多く、年間40名程度が入所および通所しています。

暴力被害の“その後”

精神科病院で、ソーシャルワーカーとして働いていた時に、気分障害、薬物依存、摂食障害といった精神疾患の背景には重篤な暴力被害があること、治療が終わっても安全な居場所を見つけれない女性が大勢いること、そして、理不尽な体験を生き延びる自己対処としてアルコールや薬物を使っていることを知りました。2010(平成22)年、ダルク女性ハウス(薬物・アルコール依存の女性をサポート)の上岡岡江さんと『その後の不自由』を上梓。さまざまな暴力被害を、女性たちがどのような形で生き延びたか、暴力が終わっても、その後に関わ女性たちの不自由とはどのようなものかを描きました。

アディクション(嗜癖)におけるジェンダー

日本における女子刑務所入所者の41.9%が窃盗、38.3%が覚せい剤事犯です(平成26年犯罪白書)。また、摂食障害の9割が女性であり、抑うつ症状や不安障害を併発しています。人間関係の嗜癖に関しては、日本では「自分よりも他者を優先する、相手に必要とされることが自身の存在意義となるといった関係性を、特に女性が社会から期待される傾向が強い」ため、「共依存」という嗜癖が問題視されることが多く、夫婦間だけでなく、親子間の「共依存」にも関心が向けられています。

包括的な援助の必要性

支援のお手本としているカナダの女性依存者に対する「包括的支援」を紹介します。そこでは、当事者である女性を、さまざまな「社会的な存在」として多面的に理解するアプローチが採用されています。医療機関が全体のマネジメントを行う一方で、その支援にはコミュニティのさまざまな専門家が参加しており、医療機関はコミュニティに「開かれている」のが特徴です。支援チームは当事者である女性が困難な状況にあっても、彼女がこの難しい局面を乗り越える主体であると考え、支援会議には当事者の出席を願い、意見を聴きます。特に子どもがいる場合は、子どもへのケアも含めた支援が組み立てられ、生活に密着した直接的かつ継続的支援が計画・実行されています。

今後の課題と展望

「その後の不自由を生き延びた女性たち」を、母親に持つ若年層の施設利用が増えています。彼女たちは、自分を見守り育む存在の欠如、あるいは不適切な養育の体験によって、孤立感と人間への不信感を強く持っています。さらに、基本的な生活の体験が不足していたり、学業からのドロップアウトや、働いていないことで、社会性の獲得も困難となっています。彼女たちの支援には、自立訓練・生活訓練ができる場所、そして働ける場所が必要です。

子どもを抱える女性の生活再建には、経済的自立の困難と合わせて、子どもとの関係づくり(母親自身がその基盤を持っていない場合もある)、地域社会での人間関係づくりなど、きめ細やかな支援の継続が必要となります。そのために、子育ての方法を学んだり、シングルマザーを支援する団体との協働をすすめているところです。

※本講演会は、平成28年12月11日に開催予定でしたが、大雪による飛行機欠航で開催できず、延期して開催いたしました。

クレオ大阪中央自主事業(平成28年度共同募金配分金実施事業)

参加者の声

- 参加者からの質問に答えられる大嶋さんに変な感銘を受けました。正直に、地道に、自ら勉強しながら実践されている姿に頭が下がりました。
- 学問に裏付けられた実践の強みと説得性に共感。学ばせていただきました。

